

## 一 建大生の追憶

千葉県 谷 口 時 彦

まえがき

歴史の流れは早い、まさに光陰矢の如しの例えのとおりである。始めに終わりの宿命を担わされた建国大学。昭和二十（一九四五）年八月二十三日の「慟哭の閉学式」から、夢のように五十有余年が過ぎてしまった。人には、それぞれ己の人生を支えている「根」、「幹」というものがあるのではないだろうか。それがその人、その人の生きざまを決めてしまう原点となっているのだと思うが、特に困難に遭遇したときには、その真価を發揮し、勇気を鼓舞してくれるようにも思われる。

私が、建国大学の学生として在学していた期間と、それから終戦を経て中国で引揚げを待つ苦しい生活をしてきた期間は、合わせてもわずか二年

足らずで、人生の線上から見ると全く芥子粒のように小さな短い点である。しかし、歴史を塗り替えるような激しい潮のうねりの真つただ中であっただけに、その強烈な人生体験は私の体の隅々にまで焼きついていて離れようとはしない。

だが、私はこの二年間を振り返るときに、歴史の激しい流れの中で、我が青春の望みは無常にも消え失せてしまい、無益な道を歩いていたという後悔の念は、毛頭もっていない。むしろ反対に、ほんの短い期間ではあったが、五族友愛の支えと、寝食を共にし机を並べて学び励んだ、またと巡ってこない得難い体験をしたこと、そして建大を通じて多くのすばらしい先輩や友人などに出会えたことは、なによりの宝物であったと、感謝の念でいっぱいある。

終戦後における新京（長春）での避難生活では、生命財産を保護してくれる国家という後ろ盾を失った民族の無力さと悲惨さを嫌というほど味わい、生死にかかわる運命的な出会いを幾度か体

験し、そしてその修羅場をなんとか乗り越えてきたが、私はその体験を通じて「困難に耐えること」として「生きていくことの尊さ」を教わった。このことは私の死生観、人生観の「根」、  
「幹」たらしめたものであり、またその後の人間形成のうえでの大きな支えと無形の財産になっている。その二年間は、本当に私の七十数年の人生において、貴重で得難い体験であつたと感謝をする以外に無い。

#### 一 建大受験そして入学

私は、朝鮮の釜山で長年にわたつて旅館業をしていた谷口家の二男として、昭和三年十月二十日に釜山の自宅で生まれ、そして建大に入学するまで釜山から離れることなく育つてきた。兄弟弟そして私と四人の子供を抱えた我が家は、少しは名の通つた旅館ではあつたが、経済的にはそんなに裕福ではなかつた。

釜山中学校を卒業してからの進路については、経済的にも日本の内地に進学することは望むべく

もなく、朝鮮が満州にある大学か高専で少しでも負担の少ないところと、両親からも言われていたし、私もそれが絶対条件として進学校を考えていた。そのような条件からすれば、当然建国大学は一つの目標であつた。

建大の「学生募集公告」の文言は、極めて単純明快であつた。即ち、「本学ハ、帝国ヲ構成スル各民族ノ青年ノ中ヨリ、俊秀ヲ選抜セシメ……」

一、学生ハ、在学中ハ塾ニ起居セシム。塾ハ諸民族共塾ニシテ、日常ノ生活ヲ通シテ建国精神ヲ体得スル道場ナリ。

一、本学ノ学生ハ、ソノ使命ノ重且大ナルニ鑑ミ、在学中必要ナル費用ハ国家ヨリ支給セラレ、卒業直後高等官試験ニ任官シ……」  
とあつた。

すなわち、新生満州国の将来を担う指導者の養成を、建学の目的として創立された大学であつた。私は、この「学生募集公告」に魅せられてしまつたし、試験時期も他の学校よりも早かつたの

で、腕だめしのつもりで受験することを決心した。

試験日は昭和十九年十月二十日。受験地は新京であった。前々日に母に付き添われて釜山から新京に向かつて、二十六時間の長旅に出発した。私にとっては初めての長旅であった。満州国の首都、新京に行くなどということは夢のような旅で、釜山の家を意気揚々として出発したが、汽車の長旅での尻の痛さだけが、今でも忘れられない思い出である。

新京駅に着いて指定された旅館に行くのに、洋車（人力車）に乗ったが田舎者と見られたのか、それとも受験生で地理不案内の者と見たのかよく分からないが、わざと遠回りされて大金をぼられるということもあった。新京は、釜山と違って十月下旬となると、もう冬の気候で寒さも厳しくて、あらかじめ靴下は二枚重ねて履いていたが、それでも皮靴を通して寒気が入り込み、足のつま先が痛くてしよがなかつた。

試験も無事に終わり、腕だめしのつもりだったが、幸いに合格することができた。

年が明けて昭和二十年二月、入学のため単身で渡満した。鴨緑江オウリョクコウを渡り安東に入ると、そこからは満州国である。車内には黒くうす汚れたような色をした綿入れの服を着た現地人が、どやどやと乗り込んで来て甲高い大声でしゃべり始めたが、そのさまは喧騒極まりなかつた。言葉の意味も分からず、ただ小うるさいだけだった。外はと見れば、車窓は二重ガラスになっているが、外側のガラス窓は凍りついて真っ白になっている、外の景色は全然見られなかつた。入学の希望に燃えているが、実際の様相は未知なる異国についての不安と恐怖心が入り交じっていて、落ち着かない気持ちのまま火車（汽車）の走りに身をゆだねるままであった。

## 二 建大教育

建国大学の建学の目的の一つは、前記したように新生満州国の将来を担う指導者養成にあつた

が、本来の建学の目的は「建国精神ノ神髓ヲ得得シ、学問ノ蘊奥ヲ究メ、身ヲ以テ之ヲ実践シ、道義世界建設ノ先覚指導者タルノ人材ヲ養成スルヲ目的トス」と、設立要綱に示されている。

日、漢、蒙、鮮、そして白露の五族の俊秀を集めて、民族的、地域的な習慣、思想、信仰、そして言語などの文化の異なる各民族を、いきなり一つ屋根の下で塾という一つの坩堝クワシに投げ入れて、民族協和という満州国建国の理念を練りあげるという、世紀の実験がなされた大学であった。傷つき、わめき、そして喜び、ときにはその傷をなめ合いながら、がんじがらめにもつれた糸を、ひとつひとつ解きほぐしていくように、地道な努力を積み重ねることによって、日本内地の大学では体験することはもちろんのこと、想像することすらできない知行一致の特異な人間形成を期待されていたのである。

建大は、新京郊外にある南湖の周辺、歡喜嶺カシキレイの高台に位置していた。春は楊柳の新緑、冬は白一

色の雪景色で、眺め絶景で首都でも一等地に所在していた。敷地総面積は約六十五万坪、キャンパス内の建造物の敷地のほかに、約十八万坪の広大な農場もあった。さらに滑空訓練場や、軍事訓練場もできなような広大な環境であった。

建大での日常生活の基本単位は塾であって、それを「塾生活」と呼んでいた。前期塾は十二棟で、塾舎の全体が中央に位置する大きな食堂を中心に左右対称に、六棟ずつが半円形に、さらに二重に配置されていてみんな平屋建てであった。私たちはこれを「八紘塾」とも呼んでいた。学生は、各民族の区別無く塾に平等に割り振られていて、一棟に二十数人が起居を共にしていた。また塾の内部には、正面中央の入口を入ると、まっすぐに裏まで突き抜ける廊下があった。建物の片側には教室の広さぐらゐの自習室があり、粗末な作りではあったが、本棚付きの机と椅子が並んでいた。反対側は自習室と同じ広さの寝室となってい

て、中央に幅一間ばかりのレンガ敷きの土間があり、通路となっていた。その通路を挟んで、両側は五十センチメートルほど床が高くなっていて、柔道場のマットのような目の粗い畳が敷かれた寢床があり、民族の異なる学生がアイウエオ順に両側に並んで寝ていた。まさに呉越同舟、そのものであった。

窓はすべてガラス張りか二重窓で、寢室の窓際の壁にはごく簡素な木製の棚が二段あって、そこには被服や、下着類、それに小間物が乗せられ、その下には寝具きちんと整頓して置かれていた。その様は、画一的で軍隊の内務班のようで少しの乱れもなかった。その他に、塾頭室、ロッカー室、銃架などがあり、それに付随して便所、洗面所があって、各塾舎はそれぞれに独立した生活の場となっていた。それに塾舎の並んでいる中央部に大食堂と浴場があつて、高い煙突から立ちのぼる煙が印象的だった。

学生の行動は、全て大太鼓の合図によつてい

た。この大太鼓は「興亜太鼓」と称されていた。一日の生活はおおむね次のとおりである。

朝六時大太鼓の音で起床、そして洗面、寢室等の整理整頓、六時半に広場に集合して点呼、日満両国の国旗掲揚、そして東方遙拝。次いで建国大に賜りたる詔書奉読、それが終わると建国体操、そして駆け足で帰塾し寢室で正座をしての精神修養、八時にやつと朝食となる。朝食後、九時の授業開始までが自習時間、午前は主として学科の授業であつた。十三時昼食、午後は農業訓練、軍事訓練（馬術、グライダー等）で、十七時訓練終了、入浴後十八時から夕食、十九時から二十一時まで自習、二十一時点呼、二十一時半寢室消灯、二十二時半自習室消灯、とびつちりと決められていて、時間管理の生活であつた。

### 三 建大生活断片

#### (一) 学科の授業

終戦後の錯乱した避難生活のためかどうか分らないが、建大での午前中の学科授業がどんな

だったか、その様子はほとんど私の記憶から消え失せている。ただ、授業中に足先が冷えてどうしようもなかったことだけは、鮮明に覚えていてる。

それに、週八時間もあつた中国語の授業では、あの漢字と発音、それに読みには閉口し、最後まで馴染めなかった。授業は石田先生と満系の講師だったが、今になると懐かしさがあふれてくる。

当時は本当に嫌だったが、満系講師の最初の「何先生の病、还没好呢（何先生の病気はまだよくありません）」という言葉は、どうしてか、いまだに記憶に残っている。

## (二) 軍事訓練

入学してあまり日のたたないころ、多分五月中旬だったと思うが、完全武装による長途行軍が実施された。目標は、塾舎南東約十キロメートルにある拉拉屯<sup>ララトン</sup>付近の浄月潭水源地だった。鉄砲を担ぎ、指定された重量に調整した背のうを背負って出発した。往路はまだまだ元気がいっぱいだったが、帰途に着くころは精根尽き果てたような姿に

なってしまった。巻脚絆はほどけてしまし、足の裏には豆ができた。それがつぶれた者もいて棒のようになつた足を引きずるようにして帰塾した。腰骨にこぶのできた者もいた。その夜は、何をすることもできずに倒れるようにして眠ってしまった。夢の中でも、馬に乗って叱咤する配属将校の憎き姿が現れて、なにかよく分からないが、大声でうわ言に叫んでいたようだった。

その後の軍事訓練のときに、南方での戦局がとみに厳しくなってきたうえに、さらに満ソ国境での緊張状態、特にシベリア鉄道を東に向かう兵員満載の装甲列車の動きが活発になつたことなどが、配属将校の口から出たが、ある教官は、「しかし、本土決戦が叫ばれている際だが、戦局のことではどうか安心しておつてよろしい」と言っていた。この言葉は一再ならずその後も度々くり返していたが、それがそのうちに単なる気休めの言葉に過ぎなくなつてしまつたとはいへ、その当時はどれほど精神的な支えになつていたことか分か

らない。

たとえ、無知のせいと冷笑されようとも、日々の生活における前途への不安、それに伴うストレスの影響を考えたときに、この教官の当時における励ましの言葉には、今でも有り難く感謝している。

### (三) 農事訓練

軍事訓練と同じように重視されていた農事訓練も印象深いものがあり、後々までも強烈な思い出として残っている。春がくると長い柄のついた農具を携行して、満州ならではの広大な農場に出掛けた。まず手始めは、高粱コウリヤンの残り株を取り除く作業であった。春とはいってもまだ少し掘り下げた畑は凍りついていて、鋤すまや鍬くわがなかなか地面にくい込まずに、力ばかりが空回りをしていらざる努力をしていた。夏になると除草が大仕事で、鍬を振るって畝に密生する草を取り除くのだが、一畝が長く行けども行けども果てしなかった。一畝を行って戻るのが、我々若い元氣盛りの学生でも

精いっぱい働きであった。ここでも知行一致の建大精神をじっくりと学んだものだった。

夕方に、広野の果てに沈む真紅の太陽を眺めていると、その雄大さ、荘厳さ、さらには神秘的な様相に我を忘れて見つめていたことが、いまだに強烈な印象として目に焼きついている。母なる夕陽は、六十年たった今でも私の青春の蘇生として脈打っている。

### (四) 塾生活

他民族の学生と本音をさらけ出し語り合うのは、消灯後の時間だった。あるときは楽しく語らい、また、あるときは口角泡を飛ばすが如き激しさで議論を戦わせた。テーマはいつも風俗習慣の違いからくる指摘であり、それが高まると民族問題になってしまう。例えば、満系の学生が何気無く手鼻をかみ、所かまわずに痰を吐き散らすので、日系学生が、その行為は不潔であるからやめてもらいたいと指摘すると、彼らはそれには答えずに、日系学生が真夜中にストームをするのは、

他人に対しての迷惑行動であり不快であると苦情を述べて反論する。ストームは、日系学生からすれば単なる若さの発散であり、他の学生に迷惑をかけているなんて思ってもいけないことであつたが、他民族の学生にとっては単純粗野な行動であるのとらえて、まさに集団で行動する日本人の性癖のあらわれであるとして、強い批判と恐怖心を抱かせていたのである。

このように単なる日常生活において、何気なく行われている身近な問題から話が始まり、段々とエスカレートしてくるうちに、他民族の学生はいつもきまって民族問題に焦点が絞られてきて、堂々と日本の批判を始めた。「王道楽土とか、五族協和、さらには日滿一徳一心などというのは、日本帝国主義のごまかしに過ぎない。口では民族協和を唱え、五族は一切平等だと言つて言つているが、建大内では何とかこのスローガンが通つていても、一步学外に出たら全然その認識は無く、日本人は我が物顔に振るまつていて、他民

族を見下した態度をとつていてではないか。第一に、なぜ支那事変を起こしたのか、また満州に建国神廟を造つて偽の三種の神器を祀り、満州国皇帝を日本の皇室の outlet としてしているではないか。これでも、植民地政策ではないというのか！」と、日ごろ胸の内にとつていふことをぶちまけてくる。こう攻められると、まだ建大に入學して短い期間しか教育を受けていない日系学生では、つけ焼刃的な受け売り観念論では他民族学生を論理的に納得させるような反ばくは、とてもできなかつた。ただ、黙つてしまふ。しかし、他民族の学生の追求もそこまでで、これ以上のことは無く議論は収まつてしまふ。

そうした激しいやりとりの中でお互いの信頼感や、親しみが深まつてきて、相互理解も可能になつてきた。学生、ひとりひとりの間の民族や、思想の違いを越えた、より強い友情の絆が培われてきたのだつた。そのような雰囲気のもとに共同生活をした塾生活こそが、民族協和の実現にとつ

て本物の行為であった。

毎日の就寝時の行事も特別であった。二十一時に夜の自習が終わると、全員それぞれ自分の寢床の前に立って一列に並び、塾頭の点呼と訓話を受けると、三分間の正座が行われる。正座が終わると、それぞれの故郷に向かって遙拝をするのだが、日系の学生は東南に向かい、白露系の学生は西北に、漢、蒙、鮮系の学生は自分の故郷の方向にとりよように、皆それぞれの故郷、故郷に對面してひざまづき、一日が無事に終了したことを家郷に報告し、真剣な祈りを捧げた。このときばかりは、建大生のひとりひとりが故郷の家族を心から敬い、愛していることを身にしみて感じた時間であった。

#### (五) 塾での食事

塾生活の中で一番閉口し、慣れるまで苦労したのが食事だ。当時は日系学生には米を、その他民族の学生には高粱の配給があったように聞いている。日常の学内での食事は、民族協和の精神から

平等が原則であった。高粱飯や包米粥（トウモロコシの粉で作った粥）が主食に多く、それにおかずとして生ねぎに味噌、丸かじりのにんにくなど出て、粗末な感じの食事であった。日系学生は、これらが何ともまずくてどうしてものを通らなかつた。このため日系学生は体重が減っていったが、氣候風土に慣れている他民族学生は、逆に体重がどんどん増えていくという現象が起きた。もつとも人間の体というものには順応性が高いので、慣れてくるに従って、食欲が出るようになってきた。

生活環境に慣れて日常の行動もゆとりが出てきたころ、外出して小舗子（泥造りの小さな店）で煎餅（大豆と粟を石臼でひいた粉を鉄板でお好み焼きのように焼いたもの、苦力の常食とされていた）を買い食いすることを覚えたが、同時に体重がめきめき増えてきた。高粱飯も、結構お代わりして食べるようになった。

そのころになると、かつて教えられた法然上人

の「身は卑しくても、心は高くありなん」という言葉も素直に理解できるようになった。そして「三つ子の魂、百までも」ではないが、今でも心に刻まれている。

食事時にも儀式があつた。食事の前後に賛歌を唱わねばならないのだつた。当番の塾頭がリードして、食前に天照大神（太陽の女神ということから）をたたえ、食後には豊受大神（農業の大神ということから）を、人間に対して豊かな食物を与えられることを感謝する意味のことを賛歌した。

独特な節回しであつたので今でもよく覚えていて、気が向くと口ずさんでいる。食前が「たなつもの、ももの千草の天照らす、日の大神の恵を得てこそ」という歌詞で、食後は「朝宵に、もの食うごとの豊受の、神の恵を思え世の人」という内容である。

#### 四 終戦前後

##### (一) 運命の岐路

「人生、一寸先は闇だ」とは昔からよく言われ

る言葉だが、突然のソ連軍の侵攻、そして終戦。その過程における私は、まさにそのとおりであった。運命の岐路に立ったときの一つの決心や判断が、その後の運命を左右するものであることを、しみじみと感じている。

建国大学一年生の夏休みに入った昭和二十年七月二十六日から八月四日の間を利用して、日系の学生は塾頭に引率されて満州国内の各地を研修旅行した。十二塾の学生は、内蒙古の興安（王爺廟）、索倫方面に旅して蒙古人の風俗習慣を見聞することとなった。旅程中に、満州事変勃発の原因となった中村大尉など日本軍人の殺害地サルシンにも足を伸ばし、今まで知らなかったことをいろいろと学んだ。そして残りの夏休み期間に、満州、朝鮮、関東州に家族のいる者は、帰省してもよいという許可があつて、私は釜山の自宅に帰つた。

八月九日に、日ソ不可侵条約を一方的に破棄して、ソ連軍が怒濤の如く満ソ国境を各方面で破

り、なだれ込んできた。日本はソ連に対して宣戦を布告した。そのニュースを知った私は、このまま釜山にいたのでは永久に建国大学には戻れないと考えて、家族の引き止めるのもきかずに、八月十一日に釜山を出発した。

釜山から乗った汽車は何とか順調に動いていたが、鴨緑江の手前の新義州に着いた途端にストップして、そこから先には行かないということで、列車運行は打ち切られてしまった。既にソ連極東軍の満州国への不法越境、侵攻が本格化していて、満州のあちらこちらでは、ソ連軍による血なまぐさい殺りく行為が始まっていたのである。

新義州の駅長からも、状況は錯綜していて大混乱のもよう、危険だから釜山に戻った方がよいと言われ、釜山行きの列車を手配してくれた。私はどうしても新京に戻り建大に帰りたくて、危険は承知の上で北に向かう列車を探した。ちょうど貨物列車があったのでそれに潜り込んだ。途中で乗り換えたり、乗り継いだりしてなんと釜山を出て

四十時間以上もかかってやっと新京駅にたどり着いた。まったくの難行、苦行の旅であった。戦局の推移がどうなっているのか、知るよしもなく、ただ、ただ建大に戻りたい一心だけの行為であった。

新京駅に這々の体でたどり着いたのは払暁前で、駅前は騒然としていた。たむろする関東軍の兵士、そして南下列車を待つている避難民の群れ、それを取り巻いて餌を狙って何か叫び声を上げている現地人などで、足の踏み場もない混乱状態であった。これを見て初めて、事態は容易ならざると肌で感じたものであった。

南嶺方面の治安が特に不穏であるとのことなので、単独で建大に行くことは見合わせ、駅近くの知人宅を尋ねて、一時そこに身を寄せた。軍関係機関と連絡をとり、そこで待機して機会を待っていた。そのうち南嶺方面に向かう軍用トラックがあることを知り、便乗させてもらって、やつとこのことで建大の塾舎に帰ることができた。既に、大

学内には日系の学生しかいなくて閑散としていた。他民族の学生は、戻ってくる考えは無かったようだ。

そこで八月十五日の終戦を迎えた。茫然自失の状態で、頭の中も真っ白になっていたらしく、十五日から数日間、どのようにしていたか、今に至るも分からない。

そして、八月二十三日の「慟哭の閉学式」を迎えたのである。閉学宣言文は次のような内容であった。

「康德五年、畏クモ勅書ヲ奉戴シ、我カ國最高学府トシテ開学セラレ爾來年ヲ閱スル事ハ星霜。学生ヲ薰陶スルコト一千五百名卒業生ヲ出ス事三回、建国精神明カニシテ訓育ノ効果漸ク顯著ナラントスルノ時、突如トシテ茲ニ閉学ヲ宣言スルノ已ムナキニ至ル。寔ニ感慨無量ナルモノアリ。

然リト雖モ此ニ教ヘ、此ニ学ヒシ経天緯地ノ学修齊治平ノ道ハ天地ノ悠久ト共ニ不滅タルヘク、東方文化ノ精粹トシテ永ク後生ニ傳ワリ萬世ノ為

ニ大平ヲ開クノ基礎タルヘキヲ確信スルモノナリ、……諸子ノ魂ノ故郷ハ敵トシテ存在ス、若シ夫レ諸子ニシテ亡羊岐路ニ迷ウカ如キコトアラハ顧テ往事学窓ニ学ヒシ東亜興隆ノ大使命ヲ想起セヨ、……東方道義ヲ発揚シ民族相協和シテ世界ノ進運ニ貢献スルアラシム事ヲ切望シテ已マサルナリ。斯クシテ我ラノ建国大学ハ形而上ヨリハ解体スルト雖モ其ノ無形ノ本体ニ至リテハ不滅ノ存在ヲ継続セントス。

諸子幸ニ自重自愛セヨ」

という内容で、これを読み、慟哭しない者は無かった。

その夜、同期の飯田君と私は、建大で割りふられた田淵先生の家に赴き居候生活に入り、敗戦国民としての生活の第一歩が始まった。

## 五 敗戦後の生活

田淵先生の家では、炭団たどんを作つて売り歩いたり、市内のあちらこちらで開かれていた古物の売買などの俄か商売をしていたが、思うような利が

無かった。官舎街周辺の警備の使役にも雇われた。いずれにせよなんとか賃金を得なければ食べられなかつた。教官官舎は、今でいう2DKの間取りで、先生の家族だけでも手狭なところに、大の男二人が転がり込んでお互いに窮屈な思いをしたので、二カ月ぐらいで出ることにした。

飯田君は、父親の知人の家を頼って行き、私は同期の伊藤君の紹介で、興安大路、興安胡同にあった新京製薬社長の大久保定次さんの家になり、用心棒兼セールスマンとして寄寓することになった。新京製薬は、麻薬中毒患者の禁断症状を抑制し、同時に解毒作用をする特許商品の「ギフトール」を製造販売している製薬会社で、社宅も寮も保有していたので、多くの避難民を受け入れて面倒を見ていた。商売がら大久保家には薬剤師の資格を持つ人も多くいたので、屋敷内に蒸留釜や滅菌装置を設置して、リングルやブドウ糖や塩化カルシウムなどの注射液を製造し、新京市内の病院に大口業務用として卸し売りを始めていた。その

ころ新京市内でも食糧不足が深刻になり、それに伴って栄養失調が一般化するとともに、衛生環境の悪化により、発疹チフスやアメーバー赤痢などの悪性の伝染病が蔓延していた。そのため、いくら生産しても足りないような状況だったので、屋敷内の薬品工場は活気を呈していた。

私は、昼間は赤十字の腕章をつけて、注射液の配達と集金に市内の病院を走り回っていた。夜は夜で製造の手伝いもしていて、なにがしかの給料ももらっていたので懐具合もよくなって、外歩きの仕事が早く終わったときなどは、当時森繁久弥、木暮実千代、二村定一、沢村国太郎など名のある芸能人が集まって旗上げ興業をした芸能座によく通って、息抜きをしていたものである。芸能座の小屋の周辺には、いろいろな屋台が集まっていたので、帰りに一杯ひっかけは、好物の天丼を食べていた。このような生活を新京を引き揚げるまで続けていた。

敗戦のショックでいろいろな苦難は受けたが、

あの北満などから着のみ着のまままで避難をして、言葉では言い表せないような惨状に遭つてきた開拓団の人たちとは、比べることのできないほど恵まれた境遇の中で引揚者としては何と幸運であつたかと、心の底から感謝の気持ちでいっぱいである。

## 六 国共内戦に遭遇

終戦になるとすぐに、新京市内にもソ連軍が進駐してきた。すなわち昭和二十年八月十九日から二十日にかけて、市内はソ連兵で埋まつたといつてよかつた。彼らの中には、胸や二の腕にそれと分かる入れ墨をしていて、あたかも雲助の如きかつこの劣悪兵隊がいた。すぐに市内の治安は悪くなった。「ダワイ！ ダワイ！」「マダム、マダム、ハラシヨウ！」と、念仏を唱えるように言葉を繰り返しながら、自動小銃を片手に市内を徘徊しはじめ、気に入らないと自動小銃を辺り構わず撃つありさま。

略奪、放火、殺傷、そして強姦などが、白昼公

然と行われるようになり、新京市内も無政府、無秩序状態となった。

巨大な、渴ききつた砂漠があくことなく水を吸い込むように、ソ連兵の五欲は市内をなめ尽くしていた。

十一月になると、中国国民党の軍隊が進駐してきた。主として満州国鉄石部隊を改編した現地速成の小部隊ではあつたが、現地民は、中央軍とか地方中央軍とかと呼んでいた。

年が明けて二十一年二月になると、ソ連軍の姿が少なくなり、四月には家の真向かいの「ゲーパーウー」の司令部も引き払われ、市内からソ連兵の姿が消えた。

ソ連兵の姿が見えなくなると同時に、得体の知れない空気が市内を覆っていた。その得体の知れない空気を破つたのは、遠くから雷の如くに聞こえてきた銃声で、その銃声は、新京の北西と南西の両方角から次第に市内中心部に近づいてきた。

そのうちに遠雷のような音は、爆竹をいくつも束

ねて爆発させたような激しい音に変わっていった。

私たち全員、大久保家の地下室に退避した。地下室から聞いていても、その激しい音はなかなか止まなかった。連続するその音はまるで人の命を吸い込むような響きを残していた。そのうちに、地上のどこかでガラスの割れる音がはじめた。

「ズドン！ズドン！」と、腹の底からこみあげるような音がしたかと思うと、すぐに地震のように重たい振動が大地を揺るがした。「手榴弾だろうか？それとも迫撃砲だろうか？」と、私たちは首をすくめながら話し合った。地下室の空気もぴんと張りつめ、そしてみんな息を潜めていた。

どのくらい時間が経っていたのか記憶に残っていないが、激しい音が段々と少なくなり、静けさの間合いがひろがる。私たちもやつと気がゆるみ、そろそろと地下室内で立ち上がった。遠くで鳴るラツパの音が聞こえ始めた。今までのすさま

じい音になじんでしまった耳には、穏やかな長い音色だった。

外に出て見ると、興安大路がその激戦の中心地であったようだ。道路上には、窓ガラスやれんがの破片などが、足の踏み場もないように散乱していた。両側に立ち並ぶどの建物も弾丸の跡だらけで、市電の架線もずたずたに切られて垂れ下がっていた。幸い大久保家には何の被害も無かった。

よくも直撃されなかったと、一同胸をなでおろしたことだった。

この激戦を最後に市街戦は幕を閉じ、新京市は中国共産党の八路軍の手に陥ちた。それまでのソ連軍や中央軍と違って、八路軍の兵士は銃で我々を脅したり、金や時計などを強奪するようなことは無かった。ましてや、ソ連兵のように「マダム！マダム！ハラシヨ！」などと言うようなこともなかった。八路軍の進駐も一カ月半ぐらいで終わり、五月下旬には移動が始まり、一人の八路兵も見かけなくなつた。

五月二十四日ごろには、八路軍と入れ替わって再び国民党正規軍が入ってきた。今度の国民党の正規軍は最精銳の部隊で、アメリカ式装備で固め、ビルマで日本軍と戦ってきた歴戦の部隊であるとのことだった。

今までの兵士とは全然異なり、全員おそろいの真新しい軍服を着ていて、軍規も厳正であったが、態度は高圧的であった。ぼろぼろの服をまとってはいたが、人民の軍隊であるという考え方と人懐っこい態度から、八路軍の方が好感をもたらしした。

#### 七 共同墓地

昭和二十年から二十一年にかけての冬期間、興安大路には大八車の往来が急に目立ってきた。北西の郊外にあった共同墓地の大房身に行き交う車で、荷台には裸同然の格好になった死体が積みあげられていて、その上には薄いムシロが掛けられていた。死体は凍ってしまっているらしく、ムシロからはみ出した手足は硬直してぴーんと伸び

きつて、まるで丸太棒のようだった。避難民收容所の周囲では、埋めきれなくなって運ばれて行くのだろう。やっとの事に入った收容所の中でとうとう命が尽きてしまった人々が、次々とこの大八車に乗せられて大房身に運ばれていたのだが、大房身でも埋葬されることはできずに、ただ置かれていたことだった。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と、ただ念仏を唱えて合掌するだけであつた。

#### 八 引揚げ、そして帰国

私は、新京市在留の日僑邦人引揚げが開始される前の昭和二十一年七月に、錦州で引揚げ事務に従事するため、先発要員として編成された学生中隊の一員となり、錦州に向けて出発した。

大久保家の人たちは、新京から日僑邦人の引揚げ後も国民党軍の技術者要員として強制留用されて残留していたが、昭和二十三年の再度の国共内戦にあつて、中共群の兵糧ぜめ、いわゆる後に言われた飢餓地獄に巻き込まれて、死線を彷徨する

修羅、餓鬼、畜生の生き地獄を体験され、昭和十八年に九死に一生を得て帰国された。それはそれは過酷なことであった。

錦州で新京居留民の引揚げ事務を一カ月ぐらいしていたが、学生は日本内地での転入学試験が始まるから、それに応ずる意志で帰国を望む者は帰国してよいという通達があつたので、早速応じた。釜山の両親たちがどうしているのか、安否を知る手立てのないままに、日本に帰れば何とかなるだろうという考えだけで、葫蘆島コロトウに向かった。

葫蘆島では数日を過ごし、アメリカのリバティ船に乗って、昭和二十一年八月二十三日に博多港に着き、初めて祖国日本の土を踏んだ。

博多の引揚援護局で、満州国紙幣の日本円への交換（五百円が限度だったと思う）、軍用シャツ一枚、コッペパンのようなもの二個、それに帰郷先までの乗車券が支給されて、入国手続きが終わった。

手続きが終わって初めて、日本に帰ったという

喜びと、終戦の直前に新義州から釜山に引き返さずに、建大恋しきに新京に向かい、そこでの避難生活一年有余、それが私の人生にとって回り道であつたかどうかという回想が頭の中をよぎり、天を仰いでほっと大きなため息をついた。夏空に星が美しく瞬いていたのが印象的であつた。

一応、父の郷里の鹿兒島に向かうことにして、博多から鹿兒島本線の夜行列車に乗った。車内は超満員で、座るどころか通路に腰をおろすこともできずに、立ち通しでほとんど眠ることもないままに、翌朝五時半ごろに鹿兒島県川内の西方駅に着いた。釜山から引き揚げているであろう家族は、どこかの家に寄留しているかも分からず、私が引き揚げてきたことの連絡をする方法も無く、不安な気持ちのままホームに降り立った。するとどうしたことであろうか、ホームには大勢の出迎えの人々がいたので目を疑った。

最初は、私を出迎えてくれたのかと思つたが、どうも様子が違う。そばの人に聞いたら、新京法

政大学に在学していた、西方出身の学生の遺骨が帰ってくるということだった。学友の胸に抱かれて、無言の帰国である。彼は終戦直後の混乱時に、新京で運悪くソ連兵の暴発に遭遇して負傷し、その後治療の甲斐無く亡くなったとのことだった。運命とはいえないかと皮肉な巡り合わせであろうか、なんとも言いようの無い重い雰囲気であった。

私の家族は、母方の親戚の家に仮住まいをしていた。「ただいま！」という私の声に、台所にいた母は「だれさんですか？」と立ちすくみ、しばらくじつと見つめていた。「時彦だよ！ 今、帰ってきた！」という言葉に、母は「夢では無いか！」と抱きしめてくれて、あとは涙、涙だった。

仏壇にはいつも陰膳が供えられ、父は引き揚げた後も、私が釜山の家に帰って来るかもしれないと、幾度か釜山に渡って家で待っていたそうだと、消息はつかめず、そこにあの遺骨で帰ってきた学

生の話を聞き、もう時彦は死んだものと半ばあきらめて、仏壇の前で手を合わせていたという。

生きていてよかった。命の尊さと、家族の愛の深さと温かみをしみじみと思った。

あとがき

建大同窓生は、今も折にふれて顔を合わせる。

国内にいる者はもとより、中国、蒙古、韓国、台湾などから学友が日本に来るから集まれと声がかかると都合をつけて集まる。イデオロギーを越え、民族を越え、人間と人間との付き合いができるのは、建大ならではの「現代神話」か。

わずか十年足らずの寿命しかなかった建大は「幻の大学」というべきか。満州国の終焉と共に幕を閉じ、王道は見果てぬ夢となった。人は死児の齢を数えると笑うかもしれないが、死児は再び戻らないにしても、建大で生まれた民族の魂は永く伝えられるであろう。これからも、海外学友との友好交流は末永く続けたいものである。